

特集 胸郭出口症候群の診断と治療

introduction

胸郭出口症候群(TOS)は、これまでも本誌または他誌において何回か特集が組まれてきましたが、依然議論の多い疾患です。それは、治療に携わる診療科が、神経内科、脳神経外科、整形外科と複数であることの影響もあります。今回、この症候群の病態・診断・治療に関する現時点における知識を整理する目的で、この特集を組ませていただきました。この分野に造詣の深い解剖学、神経内科、脳神経外科、整形外科の諸先生方に、それぞれの立場から執筆を依頼いたしました。

TOSは、現在も診断基準が確立されていない疾患群の1つであり、そのことが臨床現場での混乱をもたらしています。TOSの病態と分類について、特に神経性TOSに照準を当てて園生雅弘先生に整理していただきました。TOSが生じるのは、腕神経叢や鎖骨下動静脈が走行する胸郭出口とよばれる部位の解剖学的特徴が関与しています。その胸郭出口の解剖について中野 隆先生に概説いただきました。TOSの診断を困難にしている1つの理由が、病変を画像としてとらえにくいことです。その画像診断について袁川 創先生に単純X線・腕神経叢造影、古島弘三先生に超音波の有用性を解説いただきました。神経性TOSを診断するうえで重要な電気生理学的検査について、丹羽淳一先生に周辺疾患の鑑別を含めてご提示いただきました。保存療法の1つである斜角筋ブロック療法について、西田 淳先生に重複性絞扼性神経障害の診療上の有用性という観点で報告いただきました。TOSのなかでも難治性なのは外傷性TOSと牽引型TOSです。外傷性TOSは交通事故や労災絡みであることも多いために敬遠されがちですが、寺尾亨先生に廃用に陥る前の手術療法の重要性を含め解説いただきました。神経性TOSのうち牽引型TOSは圧迫型に比べて手術療法が奏効せず保存療法が主体となりますが、その診断と装具療法を含む保存療法を北村歳男先生に解説いただきました。TOS治療の根幹をなす理学療法について、飯田博己先生に各病態に即した治療法を提示いただきました。そしてTOSの手術療法について、治療のアルゴリズムから病態によるアプローチの使い分けまで齋藤貴徳先生に概説いただきました。

難解なTOSという病態を、さまざまな領域の第一線の先生方に多様な切り口で解説いただきましたので、是非ご一読ください。

あさひ病院スポーツ医学・関節センター

岩堀裕介